

南部菱刺しの現状と課題 地域の伝統文化の継承 と活性化に向けて

著者	川守田 礼子
著者別名	KAWAMORITA Reiko
雑誌名	八戸工業大学紀要
巻	39
ページ	11-22
発行年	2020-03-03
URL	http://doi.org/10.32127/00003942

南部菱刺しの現状と課題 —— 地域の伝統文化の継承と活性化に向けて ——

川守田 礼子[†]

Current Situation and Issues of "Nambu Diamond Embroidery" —— For Inheritance and Activation of Regional Traditional Culture ——

Reiko KAWAMORITA[†]

ABSTRACT

"Nambu Diamond Embroidery" is traditional handwork inherited in the Nambu region of Aomori prefecture. This study aims to affirm the value of the Nambu Diamond Embroidery as the traditional culture in the region, and analyze the current situation thereof. Specifically, the study extracts issues for inheritance and activation of the Nambu Diamond Embroidery in comparison with "Koginsashi" in the Tsugaru region.

Key Words: *Nambu Diamond Embroidery, Koginsashi, traditional handwork, regional culture, current situation and issues*

キーワード: 南部菱刺し, こぎん刺し, 伝統的手仕事, 地域文化, 現状と課題

1. はじめに

青森県の伝統工芸品に、南部菱刺しがある。青森県庁「青森県伝統工芸品 南部菱刺し」の解説によれば、八戸市を中心とする南部地方、旧南部藩領に分布しており、発祥は約200年前とされている。技術的には刺し子に分類され、北東北の寒冷な気候と厳しい農作業にさらされる麻地の衣服を、木綿糸で細かく刺すことにより、補修および保温性向上を図る伝統的手仕事である。南部菱刺しは、麻地の防寒補強といった実用的目的に加え、菱模様を単位とした精緻な幾何学的装飾を形成するという美的特徴を持つ。

こうした手仕事には、農家の衣生活を維持管理する役目を担った女性が従事した。寒冷のため木綿の栽培が困難な青森県では、麻を栽培し糸を績み布を織り衣服として活用してきた歴史が長い。南部菱刺しは、同県津軽地方に伝わるこぎん刺しと同様、北東北において貴重な繊維製品を最大限に活用するための生活の知恵として生まれた伝統技術であり、地域の自然環境・産業・生活文化と密接に関わり合いながら継承されてきた。

しかし、近代以降、時代の変化にともない、伝統的手仕事をとり巻く状況が大きく変化する。まず、1891年(明治24年)東北本線全線開通にともない、南部地方でも木綿布が入手しやすくなると、保温性に優れ丈夫な木綿布が日常着として普及するようになった。そして、1948年(昭和23年)大麻取締法により麻の栽培が禁止されたため、農村地帯の衣服自給生活を長く支えてき

令和1年10月28日受付

令和2年2月18日受理

[†] 感性デザイン学部創生デザイン学科・准教授

た麻織の技術は途絶えた。農家で麻織物は作られなくなり、手間をかけて麻布の防寒補強を行う必要はなくなり、農耕着は安価で便利な既製品にとってかわった。農家の女性が家族の衣服を維持するために行った必須の手仕事という南部菱刺しの必然性は、ほぼ失われたといつてよい。南部菱刺しはその実目的を失い、急速に衰えていった。こうして、南部菱刺しに関わる伝統知が喪失の危機に瀕することとなった。

こうしたなか、南部菱刺しの美的側面に着目したものに民藝運動がある。1926年(大正15年)から開始された民藝運動は、全国各地に存在する無名の職人が製作した日常の生活道具を「民藝(民衆的工芸)」と名付け、それらに「用の美」という新しい価値を見出した。優れた民藝品を求めて全国を歩いた民藝運動の創始者、柳宗悦は、青森県では「刺子着」(こぎん刺しや南部菱刺し)を取り上げ、著書『手仕事の日本』でその価値を「日本の刺子着としては一番手を込めた立派なもので、技から見ても美しさからいっても、農民の着物としては第一流のものでありましょう¹⁾」と高く評価した。

こうした民藝運動における製作物収集と調査研究を契機として、地元南部地方でも復興運動が始まった。民藝運動と関わりのあった八戸郷土研究会の小井川潤一郎らが中心となって、農村地帯に残っていた製作物の保存収集、伝統技術の継承や新規製作者の育成活動を推進した。その成果が、現在につながっている。農家の衣生活を支えるという必然性を失った南部菱刺しが、伝統工芸品として今日まで生命を保つこととなったのだ。

現在、南部菱刺しは、地域の文化資源・観光資源として改めて注目されている。こぎん刺しは古い資料や古作が残されており、昭和初期から伝統産業として製作・継承活動を続けてきたため、地元の生産基盤も安定しており全国的な認知度が高い。南部菱刺しは愛好家が地道に製作・継承活動を行ってきたが、全国的に伝統

工芸として知られるほどまで認知度が高まっているとはいいがたく、時にはこぎん刺しと混同されることもある。南部菱刺しの継承と活性化を考えると課題が多い。南部菱刺しの現状分析を扱った研究や調査も少ない。

本研究では、地域の伝統文化としての南部菱刺しの価値を確認するとともに、南部菱刺しの製作や普及活動に関する現状について分析する。特に津軽地方のこぎん刺しとの比較を踏まえ、南部菱刺しの継承と活性化に向けての課題を抽出することを目的とする。

2. 南部菱刺しの概要と先行研究

南部菱刺しとこぎん刺しは、青森県の地域性を活かして発展した染織品の代表である。いずれも寒冷地にあつて衣類の補強、保温を目的として行われた刺し子だが、技法的に相違点はいくつかある。

まず、色彩構成が異なる。それぞれの古作を比較すると、こぎん刺しは藩の統制により、藍染の濃紺色の麻地に白木綿糸で刺すのが原則で、黑白のきっぱりとしたコントラストを生む(写真12)が、南部菱刺しは本来、浅葱色(薄水色)の麻地に白木綿糸で刺すもので、やや大人しい柔らかな印象を与える(写真34)。南部菱刺しでは大正期に流通した色糸糸を刺して多色展開した点もこぎん刺しと対照的である(写真5)。

そして、模様刺し方が異なる。菱模様を単位とする幾何学模様を刺す点は共通しているが、こぎん刺しが布の縦糸の奇数目を拾って刺すため縦長の菱を形成するのに対し(写真2)、南部菱刺しは偶数の布目に刺すため横長の安定感のある菱模様となる点が異なる(写真4)。

また、単位模様や模様構成も異なる。南部菱刺しでは「型コ」と呼ばれる模様が約400種あり、組み合わせで模様を構成する。こぎん刺しでは単位模様を「モドコ」と称し、模様の組み合わせ方や模様構成の考え方が南部菱刺しと異なる。

¹⁾柳宗悦：手仕事の日本，岩波書店，p98，1985.

技法に関する先行研究には、山本 昭子・山田
いずみ「東北地方の刺し子の研究」、徳永幾久
「刺し子の研究」などがあるが、刺し子技法や
美的・工芸的価値に関して詳細に調査・分析を
行った研究はまだない。



写真1 こぎん刺し着物 (東こぎん)
(弘前こぎん研究所所蔵)



写真2 こぎん刺し着物 (東こぎん) 模様アップ
(弘前こぎん研究所所蔵²)



写真3 明治時代の南部菱刺し
(西野こよ菱繡館所蔵 筆者撮影)



写真4 明治時代の南部菱刺し 模様アップ
(西野こよ菱繡館所蔵 筆者撮影)



写真5 南部菱刺し三巾前垂れ
(AMUSE MUSEUM所蔵田中忠三郎コレクション 筆者撮影)

² 有限会社弘前こぎん研究所 : <http://tsugaru-kogin.jp/about-kogin/>

³ 有限会社弘前こぎん研究所 : <http://tsugaru-kogin.jp/about-kogin/>

歴史的な文献としては、こぎん刺しが津軽藩政時代の文献に始まり現在も入手しうる文献記録が残存しているのに対し、南部菱刺しに関する歴史的文献記録はほとんど見当たらない。こぎん刺しに関する文献を参考にするしかないという状況である。こうした背景に関して、伝統工芸士の中村禮子は次のように指摘する。南部菱刺しはこぎん刺しより歴史が古いが、藩令で奨励保護されたこぎん刺しと異なり、南部菱刺しはあくまで農民の生活の中に存在するものとして政治的に放置されてきた経緯があるという。南部地方では農村の貧困の象徴として南部菱刺しを忌避する傾向が残っており、文献や古作の保存および伝統工芸品としての認知度向上に少なからず影響を及ぼしてきたといえる。

歴史に関する先行研究として、青森県史編さん文化財部会による青森県の染織工芸調査が1996年から約10年間実施され、成果が『青森県史文化財編 美術工芸』にまとめられているほか、調査にあたった濱田淑子の論文等に詳しく記載されている。これにより成立背景や発達経緯、復興の歩みなどについて知ることができる。

昭和以降、一度途絶えかけた南部菱刺しを復興させ保存収集・継承活動に尽力した人物として、八戸郷土研究会を創立した小井川潤次郎、民俗研究家の田中忠三郎、民藝運動関連の湯浅八郎・相馬貞三・濱田喜四郎・山村精、小川原湖博物館関連の渋沢敬三・杉本行雄・中道等らの名が挙げられている。また、復興を支えた製作者として、西野こよ、松岡加恵、川村芳枝、八田愛子、鈴木堯子の名が挙げられている。

これらの人々の足跡をたどる文献として、西野こよ『南部菱刺し』、八田愛子・鈴木堯子『菱刺し模様集』、八田愛子・鈴木堯子『新技法シリーズ菱刺しの技法』、田中忠三郎『南部つづれ菱刺し模様集』が挙げられるが、いずれの書籍も現在絶版により入手困難で、南部菱刺しの研究者・製作者が入手できる文献は非常に限られている。唯一『菱刺し模様集』が2017年復刊された。

3. 南部菱刺しの現状

3.1 製作者

青森県内在住の製作者として、青森県庁「青森県伝統工芸品一覧表」および「平成30年度青森県伝統工芸士名簿」(2018年12月17日現在)を参照し、令和元年度青森県伝統工芸士新規認定者を加え、一覧にまとめた(表1)。うち、西野刺っ娘の会代表の西野こよは2019年10月に逝去した。このほかに、天羽やよい門下だった山田友子(八戸市)や、針・糸・手の会(五戸町・代表三浦たけ子)らが地元で製作活動を行っている。

青森県外で活動を行っている製作者として、他県で南部菱刺し教室講師を務める主な製作者をこぎん刺しウェブマガジン「koginbank」掲載情報を参照にまとめた(表2)。「koginbank」掲載の全121教室中、南部菱刺し講座は7教室、こぎん刺し講座は114教室であった。うち、長岡、倉茂は、八戸市在住で後に鎌倉市に居を移し「鎌倉ひしぎしの会」を主宰した八田愛子に師事し技術を習得した。倉茂は『はじめての菱刺し：伝統の刺し子を楽しむ図案帖』を出版するなど一般の手芸愛好家によく知られている。

表1 南部菱刺し製作者・伝統工芸士一覧

製作者名	伝統工芸士	認定日	所在地
天羽やよい(個人)	天羽やよい	2003.11.17	八戸市
西野刺っ娘の会	西野こよ	2002.3.6	八戸市
	佐藤玲子	2011.10.6	
	工藤まさ	2019.12.19	
ぐるーぷまつおか菱刺し研究会	松岡君子	2002.11.20	八戸市
南部菱刺し工房アトリエ縹HANADA	中村禮子	2017.12.20	八戸市
	中村晃子	2019.12.19	
南部ひしぎし七戸町保存会			七戸町
高橋博子(個人)	高橋博子	2019.12.19	五戸町

表2 青森県外の主な南部菱刺し教室講師

講師名	所在地	教室母体
藤本房江子	岩手県盛岡市	NHK カルチャー盛岡
長岡喜美子	東京都調布市	南部菱刺しの会
倉茂洋美	東京都千代田区	ヴォーグ学園東京校
	神奈川県横浜市	NHK カルチャー横浜
佐野敦子	神奈川県茅ヶ崎市	ヨークカルチャーセンター
	神奈川県小田原市	カルチャーセンター
宇田里子	広島県福山市	NHK カルチャー福山

3.2 主な活動・取組事例

各製作者が行っている製作状況や普及活動に関して述べる。地元製作者の製作状況に関しては、拙論「『南部菱刺し』に関する調査—製作者の現状について」(川守田 2017)で天羽やよい、西野刺っ娘の会、高橋博子、山田友子を対象とした聴き取り調査結果を報告した。本稿では、2017年新たに伝統工芸士に認定された中村禮子を中心に、その後の活動状況を以下に整理する。

(1) 中村禮子 (八戸市)

中村は、西野和裁菱刺塾にて西野こよに師事、西野の助手として講師を務め、「第4回郷土の伝統民芸と手工芸創作展」八戸商工会議所会頭賞(1978年)、「第32回日本民芸公募展」中小企業庁長官賞(1990年)などの受賞を果たしている。現在は八戸市白銀町で「南部菱刺し工房アトリエ縹HANADA」を主宰し、製作・展示会・ワークショップ・教室等の活動を行っている。たとえば、八戸市ポータルミュージアムはっち(以下、はっち)での個展や西野こよ門下生で構成された「南部菱刺し保存会」の展示会、自身の工房や八戸市文化会館センター南部会館での菱刺し教室、はっちでのイベント「和日カフェ」や八戸市博物館でのワークショップなどである。

中村は、南部菱刺し製作者同士の交流を促し継承・普及活動の協働基盤を作ることを目的として、八戸市内外の製作者・愛好家約30人と「南部菱刺し連絡会」を設立した。2018年3月17日、はっちで発足式が開催された(写真6)。中村は、発起人代表を務める。前述の拙論において南部菱刺し製作者の横の連携を生むシステムがないことを指摘したが(川守田 2017)、その点で中村の功績は大きい。中村は南部菱刺しに対する並々ならぬ情熱をもって、リストの作成、一人ひとりへの呼びかけ、全体調整、行政等への協力依頼を行い、本会発足を実現させた。本会を通じて南部菱刺し文化の継承と認知度の向上を目指したいと述べている。現段階では実質的な活動と成果はまだ見られないが、今後もその動きを注視していきたい。

また、中村は、2018年7月7日～10日、山形市の東北芸術工科大学で開かれた「第11回国際絞り会議 in Japan」の展覧会「日本の刺し子展」に出展、南部菱刺しワークショップも開催し、国内外の来場者の好評を得た。こうした地元に残らない活動、特に国際的な取組の蓄積は重要である。



写真6 南部菱刺し連絡会発足式(右端が中村禮子)

(2) 高橋博子 (五戸町)・山田友子 (八戸市)

地元在住のほかの製作者たちもそれぞれ精力的な活動を行っている。本稿では、高橋博子、山田友子について述べる。

高橋博子は「五戸菱刺し研究会」の代表を務め、展示会、教室やワークショップなど五戸町を拠点として活動している。教育や観光における普及活動にも意欲的に取り組んでおり、たと

例えば、東京大学「フィールドスタディ型政策協働プログラム」の2017年度事業の一つ「伝統工芸南部菱刺しの価値再構築」という活動に協力している。なお、五戸町では、五戸町地域おこし協力隊らが、地域に伝わる伝統文化として、SNSや町の広報誌を通じた情報発信を行っており、地域に密着した在り方がうかがえる。

山田友子は、「南部菱刺し研究会」主宰、南部菱刺し工房兼ショップ「つづれや」店主として、南部菱刺しを現代に活かす活動を行っている。はっちに2011年「つづれや」を開店した後、皮革と南部菱刺しをコラボしたバッグなど新しい発想による製品を発表してきた。八戸市内外での展示販売会・ワークショップ開催をはじめ、NHK Eテレ『すてきにハンドメイド』出演、北鎌倉古民家ミュージアム・浅草アミューズミュージアムにおける展示会および委託販売開始、株式会社ファイブフォックス・コムサイズム春夏コレクションの南部菱刺し監修など、従来の南部菱刺し製作者にはない活動実績を持つ。青森県外の製作者や異業種の人脈と積極的に交流を図り、南部菱刺しの普及活動につなげている。特に、山田は2018年7月「菱刺しフェス2018」を八戸市内で開催したことに着目したい。弘前市では「こぎんフェス」（こぎんフェス実行委員会主催）が2012年より毎年開催され、全国からこぎん刺しの作家が集まり作品販売を行っている。山田が主催した菱刺しフェスは南部菱刺しとして初の試みで、8人の製作者が参加した。規模はまだ小さいが、画期的な取組である。

(3) 市民集団まちぐみ（八戸市）

最後に、製作者以外の関わりを紹介する。市民集団まちぐみは、山本耕一郎を組長とした組織で、八戸のまちを元気にするプロジェクトを展開している。南部菱刺しに関するプロジェクトとして、「はっちの椅子に南部菱刺し」がある（写真7）。児童、学生や一般市民が定期開催のワークショップに参加し、はっち内の椅子に南部菱刺しを施すという取組である。中村や山田も協力した。限られた人のみが行うイメージの強い南部菱刺しを、不特定多数の体験者に開

放した点で大変ユニークな取組である。他にも、まちぐみ展として2019年2月に「ひしぎカフェ」を開催、中村の体験教室やまちぐみで製作している南部菱刺しグッズの販売を行った。



写真7 まちぐみ「はっちの椅子に南部菱刺し」

4. こぎん刺しの現状

4.1 製作者

南部菱刺しと同様に、青森県内在住の製作者・伝統工芸士を、青森県庁「青森県伝統工芸品一覧表」および「平成30年度青森県伝統工芸士名簿」を参照し一覧にまとめた（表3）。記載者数は多くないが、弘前こぎん研究所が有限会社化している点が南部菱刺しと大きく異なる。伝統工芸品・土産品としての事業化が早かった影響からか、内職としてこぎん刺しに従事する人々（刺し手）が存在することが石栗美帆子による調査で明らかになっており（石栗 2008）、現在も弘前こぎん研究所では内職のための講習会が実施されている。県内外の手芸愛好家が気軽にこぎん刺しの製作・普及活動に参入し継続的な活動につながっている事例も見られ（コーヒーチェーン店スターバックスでこぎん刺しワークショップを行う活動など）、南部菱刺しに比べ製作者層が圧倒的に厚い。また、こぎん刺し製作者以外の幅広い分野の人々が製作・普及活動に積極的に関わっており、行政・産業界からの資金助成や事業支援なども行われており、こぎん刺しを取り巻く縦横の連携体制がみえる。

表3 こぎん刺し製作者・伝統工芸士一覧

製作者名	伝統工芸士	認定日	拠点
前田セツ こぎん研 究会	坂本雅子	2003.11.17	青森市
	葛西セイ	2007.11.26	
	荒木悦子	2008.11.26	
有限会社 弘前こぎ ん研究所	三浦佐知子	2003.11.17	弘前市
	須藤郁子	2014.12.9	
岩木かち やらず会			弘前市

4.2 主な活動・取組事例

こぎん刺しの製作・普及活動状況に関して、誰がどのように価値を伝えているか、代表的な事例を見ていく。資料として、「東奥日報」2019年9月6日～10月25日連載「こぎんのいま～伝統を未来に～」などを参照した。

(1) 山端家昌「kogin.net」（東京都）

おいらせ町出身のデザイナー山端家昌は、弘前実業高等学校在学中に田中忠三郎のこぎん刺しコレクションと出会ったのを契機に、デザイン会社の仕事と並行して、こぎん刺しの研究・普及活動に携わるようになった。多様な活動の中でも最も大きな功績は、こぎん刺し情報を集約したウェブサイト「kogin.net」を立ち上げたことである。ここにアクセスすれば、こぎん刺しに関するあらゆる情報を入手できる。初心者も手軽に製作キットや図案を入手することができ、新たな製作者層の開拓につながる。特に若い世代層にはSNSを中心としたメディア活用が有効で、こぎん刺しの認知度を一気に高めたと考えられる。最近では、こぎんブックマーケット（東京都）、なるほど！こぎんツアー・古作こぎん研究会（弘前市）などのイベントを次々に開催し、製作者同士の交流や製作意欲向上、全国規模での新規ファン獲得に効果を挙げている。

(2) そらとぶこぎん編集部（弘前市）

2017年、青森市在住の鈴木真枝らが、初のこぎん刺し専門誌「そらとぶこぎん」を創刊した。現在第3号まで出版している。こぎん刺しの再興に尽力した製作者の記録、手織りの麻布などす

で失われた伝統技術の記録、公的な記録には残りにくい民間の愛好家や収集家の記録に努めている。2019年には津軽工房社とともに、こぎんの学校（弘前市）を開催している。

(3) 石井勝恵・鳥居斉「koginbank」（東京都）

東京都在住のデザイナーで弘前市出身の石井勝恵は、こぎん刺しに特化したウェブマガジン「koginbank」を運営している。山端家昌の「kogin.net」と並び、こぎん刺し製作者・愛好家の情報源となっているウェブサイトである。最も特徴的なのは、こぎん刺しの基礎的な模様「モドコ」を集積したデータベースを開設している点である。こぎん刺しの伝統模様を最重要の資源・文化財と位置づけ、次世代に継承する目的で行っている。モドコをデータ化したことによりウェブ上で不特定多数の製作者が共有できるようになったことは大変貴重である。

(4) 佐藤陽子（弘前市）

同様に弘前市在住の製作者、佐藤陽子も、師の高橋寛子が遺した作品の模様を直接手書きで起こした図案を、自身のウェブサイトで公開するとともに、『津軽こぎん刺し図案集～高橋寛子 天からのおくりもの～』として2019年自費出版した。高橋寛子は、夫の高橋一智とともに木村産業研究所（現弘前こぎん研究所）でこぎん刺しの再興に尽力した人物である。高橋寛子の作品は弘前市立博物館に収蔵されたが、一部は佐藤に寄付された。貴重な作品の模様が図案集として共有されたことは、製作者の技術向上および伝統の継承に繋がるであろう。

(5) コラボ製品・コラボプロジェクト

最後に、こぎん刺しと他分野をコラボさせた企画・製品を展開している事例を紹介する。

一つはファッションとの融合である。従来のこぎん刺しや南部菱刺しの製品には、土産品として手に取りやすい名刺入れやポーチなどが多いが、現代のファッションに取り入れて自由に楽しむことを提案した事例である。ファッションブランド「matohu」では、こぎん刺しをあしらった洋服やアクセサリを提案している。首都圏で活動する「夏次郎商店」は、津軽塗の下駄

にこぎん刺しの鼻緒を組み合わせた工芸品同士のコラボ製品を製作・販売している。

また、こぎん刺しを本来の刺し子技法から切り離して幅広く展開した事例が多数ある。こぎん刺し模様は、青森銀行の通帳デザインや青森県民手帳の表紙デザイン、JR弘前駅構内の壁面デザインなどに採用されており、一般市民が目にする機会が多い。他にも、インテリアデザインにこぎん刺し模様を応用した例として、星野リゾート 界 津軽「津軽こぎんの間」「木漏れ日 kogin」(大鰐町)、ホテル雅叙園東京「和のあかり×百段階2018」(東京都)などがある。

これらは地元および首都圏での認知度を定着させ、新たな価値を発信する効果を上げている。伝統にとらわれない柔軟な発想力による企画・製品の多様さは、南部菱刺しには見られないものである。

5. 南部菱刺しの現状分析と課題

現代は、南部菱刺しだけでなく伝統工芸産業全体が衰退しているといわれている。南部菱刺しを地域の伝統文化としてどのように活性化するのか、次世代へ何をどのように継承していくのか、指針を定めるべき岐路に立っている。

佐藤典司は「伝統工芸産業の現状と課題、および今後のビジネス発展の可能性」において、今日の伝統工芸ビジネスではマーケティングマネジメントの4P 施策の①product (製品)、②price (価格)、③promotion (販促)、④place (流通)のいずれも満足いく状態にないと述べている。ここで佐藤はその問題点として、①現代的なライフスタイルに合った製品づくりが遅れていること (product)、②生産性が低く高額商品となること (price)、③販促ノウハウの蓄積がなく資金・人材も不足していること (promotion)、④マーケットが広がらないこと (place) を挙げている (佐藤 2018)。

この全体的な問題点は南部菱刺しにそのまま当てはまる。機械化が難しい手仕事のため、衣

服の製作には時間と手間がかかり (たとえば、着物に締める袋帯4m30cm×32cmに六通柄で刺し子を施す場合、約半年要するなど)、生産性が低い。それは価格に直接反映せざるを得ず (先述の袋帯は数十万円から百万円で販売される)、高額でなければ採算が合わない。よって、刺し子技法を維持しつつ、一般的に購入しやすい価格帯に抑えるために、卓上敷き、名刺入れ、ポーチ、アクセサリなどの小物類に製品が偏る結果となる。刺し子技法から離れ伝統模様のみの特化した製品開発は、南部菱刺しの場合、山田友子のコムサイズム春夏コレクション事例以外にあまり見られない。伝統保持という姿勢が南部菱刺しには強いためか、こぎん刺しに比べ、現代的なライフスタイルに合った新しい製品づくりにあまり積極的ではない。

また、南部菱刺し製作者は、販路開拓や製品プロモーションに苦勞している。製作者のほとんどが伝統工芸の職人として「作る」ことに注力するため、販促・流通領域に関わる作業を行う余裕がなく不得手である。それを補完する人材もいないという状況である。しかし、佐藤が指摘するように、現代の市場の要求は厳しく、伝統工芸品としての高い品質だけではなく、製品デザインから、ロゴマークやパッケージデザイン、展示会案内などの販促ツール、製品展示ディスプレイ、販売ウェブサイトのデザインに至るまで、消費者への訴求力を有したハイレベルな販促戦略が求められる。したがって、伝統工芸産業にも、これらの販促・流通領域に関わる作業をディレクションし実現していく人材が求められているのである (佐藤 2018)。

そのような観点から見ると、こぎん刺しにおける山端家昌の役割は重要である。グラフィックデザイナーである山端は、こぎん刺し新製品の開発・提案はもちろん、こぎん刺しの製作・普及活動を支えるコーディネーター・プラットフォーム的な役割を担っている。情報集約・情報発信・相談窓口がkogin.netとして集中管理されている点がわかりやすく、他のメディアとも連携しながら、製作者や愛好家・消費者を結びつ

ける強力な媒体となってる。山端らが仕掛ける動きが周囲を巻き込み、個人で活動することが多い製作者同士が交流する場や、製作者と消費者が直接関わる場の形成につながり、ひいては地域全体で振興支援していこうとする機運を高めている。南部菱刺しでは、横の連携や全体の活動を牽引する体制が不足しており、製作者個人の単独活動に留まっている。

また、こぎん刺しの特徴として、ウェブや雑誌などのメディアを有効に活用していること、地元に残る古作の調査や製作・収集に関わった故人や古老の聴き取り調査など文化財としてのこぎん刺し研究が行われていること、またその研究・調査の成果がメディア等を通してオープンに共有され学習コンテンツとして活用されていることなどが挙げられる。これらはいずれも南部菱刺しでは立ち遅れている分野である。南部菱刺しの古作は、県外に流出したものが多く、AMUSE MUSEUM「田中忠三郎コレクション」や日本民藝館などが所蔵している。地元南部上北地方の公的施設では、三沢市教育委員会が保管している「南部のさしこ仕事着コレクション」(旧小川原湖民族資料館所蔵) 64点が最も多く、ほか五戸町役場に数点、八戸市博物館には三巾前垂れが2点あるのみである。民間施設としては、西野こよの菱繡館に莫大なコレクションが所蔵されているが、一般には未公開で研究・調査は行われていない。

また、南部菱刺しに関する歴史的な文献がほぼない状況下で、古くから製作・収集に当たってきた人々を対象とした直接的な調査・研究は必要である。拙論(川守田 2017)でも製作者への聴き取り調査を行ったが、調査をより深化させ、個々のオーラルヒストリーから南部菱刺しの歩みを明らかにする試みも有効である。南部菱刺しにまつわるストーリーの共有は他者の共感を生みやすく、製品供給の際にも活用できるのではないだろうか。

最後に、2011年以降、東日本大震災被災地で展開した手仕事プロジェクトに触れておきたい。震災後、新たなビジネスモデルを通して復興に

つなげようとするソーシャルビジネスが各地で台頭した。特に女性による手仕事やハンドワークを核とするソーシャルビジネスが数多く発生し、全国的に大きな反響を呼んだ。代表的なものは、宮城県石巻市雄勝町・牡鹿町のつむぎやOCICAプロジェクト、気仙沼市の気仙沼ニッティング、亶理町のWATALIS、岩手県大槌町の大槌復興刺し子プロジェクトなどである。こうした動きに関する先行研究・調査は、大滝精一「東日本大震災復興とソーシャルビジネス」、金谷美和「手仕事グループがつくる『つながり』の諸相:東日本大震災被災地の調査から」などに詳しい。

亶理町のWATALISで実地調査した際、代表理事の引地恵から事業展開を図るまでの経緯を聞くことができた。これらの手仕事プロジェクトは被災地の女性の仕事を創出するところから始まっている。震災直後は皆で集まって活動すること、手を動かすこと自体に意義があり、手仕事の間が交流の拠点となり癒しの場となっていた。時間が経過するにしたがって、プロジェクトの方向性を定める必要性が生じ、どこまで事業化していくのか、何を目指していくのかを明確に決定し、それをプロジェクトチーム内で共有することを行ったという。

WATALISをはじめとする手仕事プロジェクトやソーシャルビジネスは、産業的な収益性確保という目的を明確にしたという点で参考にした。もちろん、東日本大震災手仕事プロジェクトは、未曾有の災害という強烈な動機付けがあった点、手仕事の多くが伝統工芸品という制約がないものであった点など、南部菱刺しと異なる背景を持っている。しかし、こうした他地域で展開した手仕事プロジェクトにおける成果や課題は、南部菱刺しの在り方について示唆を与えてくれる。南部菱刺しの製作者が何をしたいのか、地域が南部菱刺しに何を求めるのかを改めて問い直し、明確な目標を設定することが必要なのではないだろうか。それを協議するためにも、南部菱刺しに関わる情報集約システムおよび連携体制の構築が求められる。

6. おわりに

以上、こぎん刺しとの比較に基づき、南部菱刺しの現状分析と課題抽出を行ってきた。南部菱刺しは製作者個人の単独活動が主で、情報発信や販促活動が分散しがちであり、南部菱刺しの製作・普及活動の全体像が見えにくくなっている。全体像の見えにくさは、「南部菱刺しは聞いたことがあるがどのようなものか知らない、誰かが何かをやってはいるのだろうか何を行っているのか分からない」という印象の希薄さや関心の低下につながっている。南部菱刺しの継承と活性化には、製作者同士を横断的につなぎ情報を共有できる場、課題解決や活性化対策について実効性のある議論ができる場の設定と、それを構築・運営する人材の育成が急務である。

これらの課題解決に向けて、大学の研究者や学生はどのように関わられるだろうか。

筆者は、南部菱刺しなど地域の伝統文化や伝統工芸をテーマとした授業で、受講生に毎年、伝統文化や伝統工芸の現状と今後について意見を記述させている。大半の意見は「伝統文化が消滅するのは忍びない、大事な文化・技術だから残したい」である。しかし、踏み込んで尋ねてみると、「それを行うのは自分以外の誰かであり、自分は積極的には関わらない（関われない）」と考えている。こうした意識は学生に限らず一般的な見解といってもよいだろう。地域文化の課題を当事者として受け止め、伝統文化の継承・普及活動に能動的に関わる意識や姿勢を養成することの難しさを、教育現場において筆者自身常々感じている。しかし、こうした意識や姿勢の養成こそ大学教育の最も大きな役割である。南部菱刺しの継承・普及活動に関わる人材は必ずしも製作者でなくともよい。製作者以外であっても、製作者や地域のニーズを把握し、南部菱刺しの価値を認識したうえで、当事者意識を持って南部菱刺しの継承・普及活動に関わることのできる人材の育成は重要である。

筆者が勤務する八戸工業大学では、文部科学省「平成29年度 私立大学研究ブランディング事

業」に「北東北の人口減少社会における自律的課題解決に向けたハブ機能構築と社会的資本の維持開発研究事業」が採択されるなど、地域に根差した大学として、地域社会が抱える諸問題の解決や地域活性化に寄与する取組を推進してきた。大学を「地域課題解決ハブ」組織として位置づけ、地域連携の場づくりを展開してきた。

こうした背景を踏まえ、南部菱刺しの継承と活性化に向けて、本学が取り組むべき事業として以下三点を提案する。

- ①製作者の横断的連携と地域全体の支援体制づくりを支えるプラットフォーム構築およびコーディネーター・ディレクター的機能を担う人材育成
- ②伝統知（人的物的財産）の収集と調査研究およびデータベース化
- ③学生発信の新製品開発やイベント企画およびメディア活用の提案

今後は、これらの事業の実践に向けた研究・教育活動を行っていく予定である。実践成果は次稿以降で報告することとする。

謝 辞

本研究にご協力くださいました製作者の皆様、関係各位に改めて厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 青森県庁商工労働部地域産業課「青森県の伝統工芸品 南部菱刺し」：
https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/shoko/chiikisangyo/aomori_dento-kogei_nanbuhishizashi.html（最終アクセス：2019年10月28日）
- 2) 日本民藝協会：<http://www.nihon-mingeikyokai.jp/>（最終アクセス：2020年1月16日）
- 3) 柳宗悦：手仕事の日本，岩波書店，1985。
- 4) 有限会社 弘前こぎん研究所：<http://tsugaru-kogin.jp/>（最終アクセス：2019年10月28日）
- 5) AMUSE MUSEUM：<https://www.amusemuseum.com/>（最終アクセス：2019年10月28日）2019年3月閉館

- 6) 青森県史編さん文化財部会：青森県史文化財編 美術工芸，青森県，2010.
- 7) 山本 昭子・山田 いずみ：東北地方の刺し子の研究（その1 - 刺し子,こぎん刺し,菱刺しについて -，生活科学，13号，pp.101-121，1982.
- 8) 徳永幾久：刺し子の研究，衣生活研究会，1989.
- 9) 濱田淑子：津軽こぎん・南部菱刺し - 工芸美の発見から再興のみちすじ，青森県史研究，7号，pp.84-105，2002.
- 10) 濱田淑子：「津軽こぎん」と「南部菱刺し」，民俗芸術，19号，pp.114-125，2003.
- 11) 濱田淑子：「津軽こぎん刺しと南部菱刺し」 - 青森県史染織調査を担当して -，民芸の心を学ぶ講演記録集，第140回日本民藝夏期学校青森会場，pp.39-70，2012.
- 12) 西野こよ：南部菱刺し，菱繡館，2007.
- 13) 八田愛子・鈴木堯子：菱刺し模様集，菱刺し模様集刊行会，1980.
- 14) 八田愛子・鈴木堯子：新技法シリーズ 菱刺しの技法，美術出版社，1989.
- 15) 田中忠三郎：南部つづれ菱刺し模様集，北の街社，1977.
- 16) 青森県庁商工労働部地域産業課「青森県の伝統工芸品」：
https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/shoko/chiikisangyo/dento-kogei_aomori.html (最終アクセス：2019年10月28日)
- 17) 青森県庁商工労働部地域産業課「青森県伝統工芸士 工芸品目別一覧」：
http://61.199.163.171/soshiki/shoko/chiikisangyo/files/h30_dentoukougeishi-meibo.pdf (最終アクセス：2019年10月28日)
- 18) 青森県庁プレリリース「令和元年度青森県伝統工芸士認定証授与式を開催します」：
<https://www.pref.aomori.lg.jp/release/2019/64725.html> (最終アクセス：2020年1月16日)
- 19) koginbank「こぎん刺し教室」：<https://koginbank.com/class/>
(最終アクセス：2019年10月28日)
- 20) NHK カルチャー盛岡教室「南部菱刺し」：
https://www.nhk-cul.co.jp/programs/program_432270.html (最終アクセス：2019年10月28日)
- 21) 調布市生涯学習情報コーナー「南部菱刺しの会」：
<http://gakusyu.chofu-city.jp/01-00023770/> (最終アクセス：2019年10月28日)
- 22) ヴォーグ学園東京校「倉茂洋美の菱刺しサロン」：
[https://www.voguegakuen.com/course.php?prc=detail&f_school_id=1](https://www.voguegakuen.com/course.php?prc=detail&f_school_id=1&sid=11445&f_list_icon=3&f_search_kind_id=9)
&sid=11445&f_list_icon=3&f_search_kind_id=9 (最終アクセス：2019年10月28日)
- 23) NHK カルチャー横浜ランドマーク教室「はじめての菱刺し」：
https://www.nhk-cul.co.jp/programs/program_1094081.html
(最終アクセス：2019年10月28日)
- 24) ヨークカルチャーセンター茅ヶ崎「はじめてのこぎん刺し南部菱刺し」：
https://www.culture.gr.jp/detail/tigasaki/itemview_13_903019640.html
(最終アクセス：2019年10月28日)
- 25) カルチャーセンター小田原「はじめてのこぎん刺し南部菱刺し」：
https://www.culture.gr.jp/detail/odawara/itemview_38_903010244.html
(最終アクセス：2019年10月28日)
- 26) NHK カルチャー福山教室「南部菱刺し・こぎん刺し」：
https://www.nhk-cul.co.jp/programs/program_423361.html (最終アクセス：2019年10月28日)
- 27) 倉茂洋美：はじめての菱刺し：伝統の刺し子を楽しむ図案帖，河出書房新社，2015.
- 28) 川守田礼子：「南部菱刺し」に関する調査—製作者の現状について，八戸工業大学地域産業総合研究所紀要，13巻，pp. 21 - 29，2017. (平成28年度 八戸工業大学特別研究助成)
- 29) 南部菱刺し工房アトリエ縹 HANADA：<https://hishizashi-hanada.jimdo.com/> (最終アクセス：2019年10月28日)
- 30) 八戸経済新聞：<https://hachinohe.keizai.biz/headline/767/> (最終アクセス：2019年10月28日)
- 31) 国際絞り学会：<https://wsnjp.wordpress.com/iss/> (最終アクセス：2019年10月28日)
- 32) 石栗美帆子：こぎん刺しのモダニティに関する人類学的研究，平成20年度弘前大学人文社会学部卒業研究，
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/jinbun/web/img/pdf/research20/soc2.pdf> (最終アクセス：2019年10月28日)
- 33) 東京大学「フィールドスタディ型政策協働プログラム」：
<https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/students/special-activities/h002.html> (最終アクセス：2019年10月28日)
- 34) つづれや：<https://hishizashi.jimdo.com/> (最終アクセス：2019年10月28日)
- 35) 八戸経済新聞：<https://hachinohe.keizai.biz/headline/868/> (最終アクセス：2019年10月28日)
- 36) 八戸市民集団まちぐみ「まちぐみ発行物」：

- <http://machigumi.main.jp/publish.php> (最終アクセス：2019年10月28日)
- 37) 斎藤美佳子「スタバ de こぎん」(現みんなのこぎん) : <https://saitoumikako.com/blog/hirosaki/201904kogin.html> (最終アクセス：2020年1月16日)
- 38) 東奥日報：連載「こぎんのいま～伝統を未来に～」，2019年9月6日～2019年10月25日
- 39) kogin.net : <https://kogin.net/> (最終アクセス：2019年10月28日)
- 40) そらとぶこぎん～津軽発のこぎん刺し雑誌 : <https://www.facebook.com/soratobukogin/> (最終アクセス：2019年10月28日)
- 41) koginbank : <https://koginbank.com/> (最終アクセス：2019年10月28日)
- 42) 佐藤陽子こぎん展示館「図案」 : <http://youko-kogintenjikan.com/link.html> (最終アクセス：2019年10月28日)
- 43) matohu : <https://www.matohu.com/> (最終アクセス：2019年10月28日)
- 44) 佐藤典司：伝統工芸産業の現状と課題，および今後のビジネス発展の可能性，立命館経営学，第57巻 第4号，pp. 59-74, 2018.
- 45) 大滝精一：東日本大震災復興とソーシャルビジネス，経済研究所年報，第30号，pp. 5-37, 2017.
- 46) 金谷美和：手仕事グループがつくる「つながり」の諸相：東日本大震災被災地の調査から，日本文化人類学会研究大会発表要旨集，第30号，p. 21, 2016.
- 47) 一般社団法人 WATALIS : <https://watalis.jimdo.com/> (最終アクセス：2019年10月28日)
- 48) 八戸工業大学 私立大学研究ブランディング事業 : <https://www.hi-tech.ac.jp/branding/> (最終アクセス：2020年1月16日)

要 旨

南部菱刺しは青森県南部地方に伝わる伝統的手仕事である。南部地方の自然環境・産業・生活文化と密接に関わり合いながら継承されてきた。本研究では、地域の伝統文化としての南部菱刺しの価値を確認するとともに、その現状について分析する。津軽地方のこぎん刺しとの比較を踏まえ、南部菱刺しの継承と活性化に向けての課題を抽出する。

キーワード：南部菱刺し，こぎん刺し，伝統的手仕事，地域文化，現状と課題